

濁水かわら版

第 90 号 2019 年 9 月 14 日
ボケ防止を兼ねて 中安 宏規

日本の戦争 25

中庵少尉の 2 つの戦争完結編

太平洋戦争編

第 88・89 号で中庵少尉(私の父)が、太平洋戦争に 46 歳 2 か月で臨時招集を受け応召したことを記した。遺品の折帖の絵を基に、**絵①** 応召入隊・**絵②** 護国神社参拝の地名が記されてなく、軍歴にある盛岡か水戸か? 背景の山が岩手山か筑波山か? 不明としたが、地図の護国神社は水戸を想定した。ところが 89 号配信後、盛岡在住の岩手日報 OB から、「赤い建物は、旧陸軍の屋根で覆った「覆馬場」で現在も盛岡にある」メールが届き、**下図 A** の現状を撮影し送稿して下さった。第 88 号の **絵①** と **②** は盛岡と判明した。



① **図 A** により、中庵少尉の応召から復員までが **図 B** のように完結した。1945 年 4/25 日、会津若松の東北 124 部隊に 応召 → 盛岡市第 39 戦車連隊に転属 → 連隊は茨城県鯉淵村に移駐 → 敗戦を迎える。また、同戦車連隊が同年 4/6 日創設後、不明の編成地が岩手山麓の**観武ガ原**であった点も判った。

② **図 A** の覆馬場は現在、盛岡市所有の「盛岡ふれあい覆馬場プラザ」として市民に利用されている。以下、観武ガ原と覆馬場の足跡をたどる。岩手県議会は日露戦争直後の 1906 (明治 39) 年、同県出身の原敬内務相らに兵営設置の請願を提出している。軍は 2 年後の 08 年、弘前の工兵第 8 大隊を盛岡市に移駐した。翌 09 年、騎兵第 3 旅団を創設し指令部と第 23・24 連隊を設立した (**図 B** ㊦)。そこから北側の岩手山麓の荒地が**観武ガ原** (現同市青山) と呼ばれ、悪天候の調教用に屋根つき「レンガ造りの覆馬場」を 6 棟建設した。第 39 戦車連隊は、そこに約 20 日間滞在し、軍事訓練を行ったと思われる。

③ 敗戦後、観武ガ原の兵舎や覆馬場は、→ 次頁へ

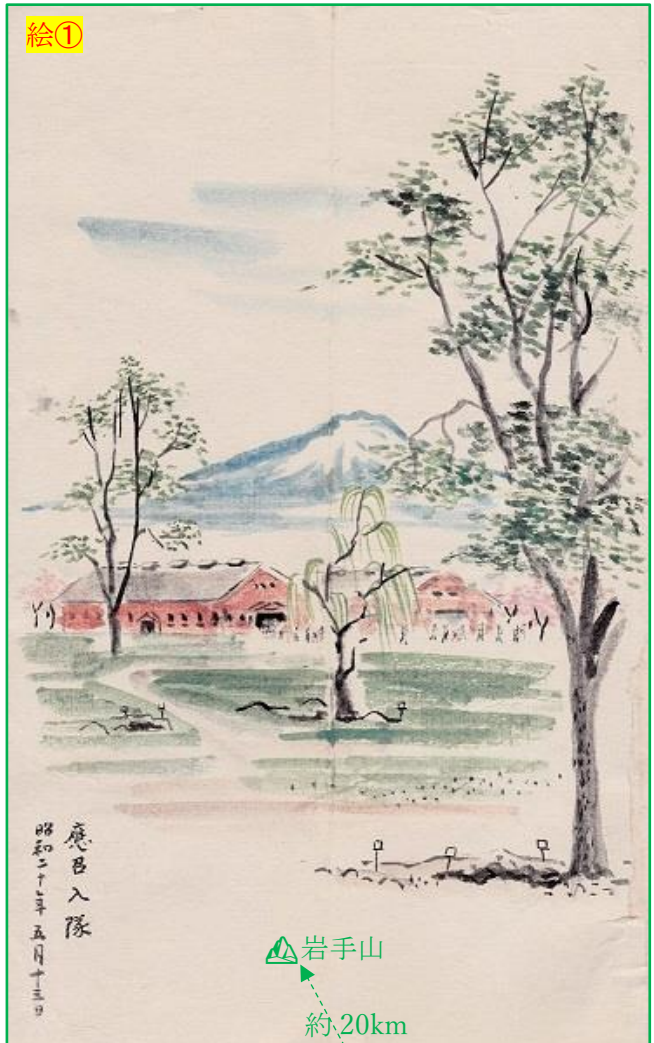


図 B ① 会津若松市

1945/4/25 中庵少尉 応召
5/11 盛岡へ向け出発

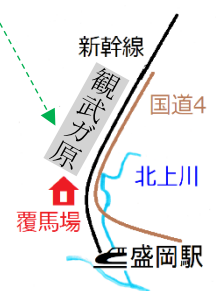
② 盛岡市 観武ガ原

5/12 盛岡着 39 戦車連隊に転属
5/15 戦車連隊編成完了
5/23 岩手県護国神社参拝
5/30 戦車連隊盛岡発 茨城県へ

③ 茨城県鯉淵村 (現水戸市)

5/31 鯉淵村河和田着
6/13 御払式
8/ 巴村で築壕作業
8/15 敗戦
8/24 鯉淵村中台に集結
8/26 復員部隊会食
9/14 復員式分列行進

中庵少尉の応召
から復員まで



覆馬場は盛岡駅から約 3km。観武ガ原の命名は大正天皇と言われ昭和 3 年の地図に見える

前頁から) 海外からの引揚者寮となる。その使命が終わると、企業の工場や倉庫に利用されたが、寿命を迎えた覆馬場は 2008 年、次々に解体された。最後の1棟を青山地区の市民有志が、歴史的遺産として市に残すよう請願、市議会が2011年に承認。市はレンガを補強し、屋根を復元して翌 12/6/1 日、明治の姿の多目的交流施設(1192 m²)として開館した。

④ 盛岡は、昔から名馬の産地と言われ、軍が注目したようにも思われる。1943/5/30 日、アッツ島守備隊が玉砕した。岩手県出身戦死者 327 名。戦後 40 遺体が収容された激戦地を、郷土兵は「観武ガ原」と呼んでいた。②以下の足跡は盛岡市 HP、毎日新聞盛岡支局編「岩手の明治 100 年」、岩手日報社編「近代化遺構を歩く・いわて未来への遺産」などより

図C

豆本を携行



戦陣訓

9cm×15.6cm
32 ページ
1941/6/01 日
軍人会館図書
部 刊
定価 3 銭

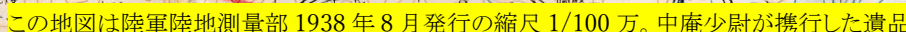
図Cは、中庵少尉が携行した豆本遺品である。①「戦陣訓」は下に記したような冊子。太平洋戦争約1年前の41/1月、東條英機陸相が軍人の道徳本として編纂したと伝わる。図Dの本訓其2第8「名を惜しむ」は、「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪科の汚名を残すこと勿れ」を強要している。②「戦陣訓解」。①のアンチョコである。初版は同年 3/25 日。定価 25 銭。中庵少尉は 5/28 日 8 版を所持。③「歩兵操典」は 44/11/25 日発行の改訂版。40/2 月、43/12 月にも「朕の改定勅語」が載る。376 頁に 671 項目+αで厚さ 2.3cm。定価 66 銭。覚えきれものではない。④は③のアンチョコ。388 頁で定価 50 銭。中庵少尉は 45/1 月発行の 151 版を携行。⑤「軍人勅諭早わかり」は、明治・大正・昭和の 3 代の天皇が「親しく軍人に御諭し遊ばされることば」。「我が国の軍隊は…」で始

まる前文と五か条(忠節・礼儀・武勇・信義・質素)+後文からなる。内容は神武天皇から徳川幕府に至る日本武力略史で随所にルビ付き変体平仮名が使われている。5 か条を忘れないため、先頭の文字「ち・れ・ぶ・し・し」から「散れ武士死」を推奨している。42/3 月 45 版、定価 25 銭。⑥「補助衛生兵教程」は戦地の衛生兵に対する教科書。37 年版を所持。中庵少尉は支那事变応召で衛生隊補充員の下命を受けていた(次頁①参照)。⑦「詔勅集」は表紙に昭和20年8月と建21410部隊とあるのみで発行元など不明だ。内容は8/14日のポツダム宣言受諾に関する詔書、8/17日の陸海軍軍人への勅諭など5編を収録。貴重な冊子だ。⑧「歩兵教練ノ参考」は、③「歩兵操典」に類似の戦闘教練の陸軍教科書とアンチョコを兼ねた陸軍歩兵学校編の41年の140版。定価50銭。★⑥⑦を除き、散見されるプロパガンダ玉砕は国家の犯罪と言える。

図D

名を惜しむ
生きて虜囚の辱を受けず、死して罪科の汚名を残すこと勿れ。
恥を知る者は常に郷黨家門の面目を
第八名を惜しむ
愈々奮勵して其の期待に答ふべし。

81 年目の解明



⑪11/11～12/5 日、通城^{とんちやん}⑨付近の警備。
⑫12/14 日、武昌⑩集結。通城で赤痢に罹患。部隊からの脱落死を恐れ軍医の援助と粥^{かゆ}と下剤で 90 里≒350kmの行軍を行い武昌到着時、赤痢は全快。
⑬武昌発。船で 12/20浦口(南京②)上陸。
⑭南京から列車で 12/25 日、天津付近に到着。
⑮12/26 日～翌 14/4/20 日まで天津付近の警備。
⑯警備中の 2/21 日、軍令第 7 号により復員下令。
⑰4/21 日より帰還のため天津付近に集結。
⑱天津→塘沽^{たんぐー}5/13 日発→5/18 日、字品着。同日歩兵第 11 連隊補充隊に帰隊→同 24 日、召集解除。
⑲帰京した日時は不明も、桐箱入りの「歩兵第 11 連隊 支那事変凱旋記念」の漆塗り木杯が残る。
★「水と兵隊」は、伏字で不明な点が多々あるも、軍歴により 81 年目に支那事変応召が解明できた。